河内飛鳥と磯長・終末期古墳を考える

山本　彰

1　はじめに

ぼくは、平成９年４月から平成15年３月まで大阪府南河内郡河南町に存在する近つ飛鳥博物館に学芸課長として勤務していたので、かつてはよく河内飛鳥について書き、話をしてきた。しかし、それはぼくが学んできた考古学によるものだ。今回も万葉文化館の共同研究で話をするように言われたときも「考古学の話なら可能だが」と電話をさせていただいたが、「それで結構です」と返事を頂いたのでお引き受けすることになった。

そこで、「河内飛鳥と磯長・終末期古墳を考える」というタイトルで、まず河内飛鳥の範囲、磯長の範囲について考え、その後に終末期古墳と古道、河内飛鳥の古墳をどのように保存していくかという四つの点から話をさせていただきたいと思う。

これまで話をしてきた河内飛鳥地域は、大和の飛鳥に比べて古墳だけを取り上げると遜色ない。にもかかわらず河内飛鳥はあまり知られていない。

このため、ここ数年河内飛鳥を中心に所在する個々の古墳を検討して、近つ飛鳥博物館の館報に近つ飛鳥博物館周辺の古墳という副題でこれまで７つの古墳と古墳群を掘り下げて発表（１）してきた。

こんな中で思うことは、大和との決定的な違いは宮と古代寺院で、河内の飛鳥には明確なものがないこと。誤解を恐れずにいうと大和飛鳥は、歴史の舞台とそれを取り巻く墓域が一体となっていたことがあげられよう。つまり河内の飛鳥は歴史の舞台とは切り離された黄泉の世界が中心で生活臭がない。さらに、大和飛鳥は橿原考古学研究所・奈良文化財研究所が精力的に学術調査を行い、常に新しい話題をまいてきたことも一因といえる。

2　河内飛鳥の範囲

ところで、忘れてはならないことがある。『倭名抄』に記された古代の行政区画から言うと天皇陵が多く存在する河内の磯長の地は、石川郡に属しており安宿郡ではない。安宿の範囲は大和川より南の柏原市から羽曳野の東辺で、よく誤解されがちだがむろん近つ飛鳥博物館も石川郡に属している。誤解を招く一因は博物館の名前にもあるのだが、近つ飛鳥博物館のHPでは古事記に記載された近つ飛鳥を広い意味で捉えているようだ。

ぼく自身はというと、昭和62年に毎日グラフ別冊で「近つ飛鳥を歩く」という文章を書いてほしいと依頼を受けたときには、「その地理的な広がりについても、羽曳野市の古市付近までをその範囲とする説や、現在も「飛鳥」という地名を残す羽曳野市の東南部周辺のみとする説もあり、地名の由来同様にまだ定説が生み出されるには至っていない。そこで、本稿では近つ飛鳥の範囲をとりあえず古墳時代後期および終末期に築かれた古墳の地理的分布を念頭において、おおむね羽曳野市の東辺の丘陵地帯から、その南側の太子町・河南町周辺に所在する終末期古墳を紹介することにする（２）」として逃げておくことにした。

今に至るまで、問題があると感じながらも、とりあえず７世紀代の古墳が集まるあたりを漠然と求めに応じて河内飛鳥や近つ飛鳥と使い分けている。

河内飛鳥を広く捉えることになったのは、昭和40年代前半に「日本の中の朝鮮文化」がブームに

なった頃からである。また、高松塚の調査を契機として「もうひとつの飛鳥」として再度注目をあびることになったように記憶する。さらに追い討ちをかけたのは、一須賀古墳群で住宅建設が計画された昭和59年から数年間、全国の有識者を巻き込んでつくられた保存運動団体が、河内飛鳥を守る会と名乗っていたことや泉北考古資料館で夏季特別展として『河内飛鳥（3）』が行われ一須賀古墳群の出土品が展示されたことも、なんとなく一須賀古墳群が河内飛鳥の範囲に入ると思われている要因である。

ともあれ河内飛鳥は、大和の飛鳥との混同を避けるために新たに生まれた言葉で歴史性を持っていないからさほど問題はないかもしれないが、近つ飛鳥の範囲は近年どんどん広くなってきた。ただし、これは学問的に確定されたものではないということを強調しておきたい。

周知のとおり『倭名抄』において安宿郡は、賀美郷・尾張郷・資母郷にわかれ、吉田東伍氏は『大日本地名辞書』の中でそれぞれ、羽曳野市の駒ヶ谷・飛鳥の地域、国分地域、片山・玉手・円明の地域を想定する。また、近つ飛鳥博物館が名前の起こりとして引用する古事記の記述にしても大坂山（穴虫越え）の登り口の限定した地域をさしていることは明らかである。

3　磯長の範囲

次に磯長の範囲を考えたい。

平安時代のことだが『倭名抄』では、石川郡には佐備・紺口・新居（雑居）・大国の四郷があり、磯長の名は見えない。一方、『日本書紀』・『古事記』で磯長の名が頻繁に認められるのは、飛鳥時代の天皇を葬った先としてである。敏達天皇・用明天皇・推古天皇・孝徳天皇・聖徳太子墓の所在地として登場するのだが、現在それぞれの陵墓に治定された古墳が存在する。これらの陵墓については先に検討したところで、結論として孝徳天皇については別の候補をあげることとなったが、敏達天皇・用明天皇・推古天皇・聖徳太子墓は、それぞれの人物が葬られているとしてよい（4）としたところである.

次に延喜式の陵名に注目すると、

河内磯長中尾陵　譯語田宮御宇敏達天皇。在河内国石川郡。兆域東西三町。南北三町。守戸五烟。

河内磯長原陵　磐余池辺列槻宮御宇用明天皇。在河内国石川郡。兆域東西二町。南北三町。守戸三烟。

磯長墓　橘豐日天皇之皇太子。名云聖徳。在河内国石川郡。兆域東西三町。南北二町。守戸三烟。

磯長山田陵　小治田宮御宇推古天皇。在河内国石川郡。兆域東西二町。南北二町。陵戸一烟。守戸四烟。

大坂磯長陵　難波長柄豐碕宮御宇孝徳天皇。在河内国石川郡。兆域東西五町。南北五町。守戸三烟。

とある。

このことから、記紀や延喜式編纂段階では、確実に磯長と呼ばれた地域が存在したことは確実である。現陵がほぼ間違いないとするぼくの立場からは、逆にこれらの古墳のある範囲は、最低磯長の区域に属すると見てよい。ここにおいて初めておぼろげながら、磯長の範囲が明確になってくる。

ところで、考古学から磯長の範囲を考えるときは、当該地域が他の地域とは異なる文化の事象をあげる必要がある。この場合磯長は石川郡に属するので安宿郡に属する古墳との対比が不可欠である。

安宿郡を代表する古墳に飛鳥千塚があるが、飛鳥千塚の特徴は、ほぼ例外なく寺山が産出した石英安山岩を石室にもちいることと、群中に古いタイプの横口式石槨が存在するということであろう。つまり、石英安山岩を用いる文化は後の安宿郡の賀美郷の文化の特色と言い換えることができる。

逆に考古学の事象として確実に磯長の範囲と思われる区域では今のところ、発掘調査が実施された尼ヶ谷古墳をはじめ、観察できるものでは石英安山岩の使用は認められない。壁材に石英安山岩を使用する御嶺山古墳は太子町に存在することから磯長谷古墳群として扱われがちだが、丘陵が逆を向き磯長の範囲に入れることは難しい。

なお、近年調査された田須谷古墳は削平を受けていたが、やはり石英安山岩が使われていた痕跡はない。

磯長の南側をどこまでとするかも難しいが、一須賀古墳群でも石英安山岩を使用した例はなくかつ羨道や前室を持つ古いタイプの横口式石槨はみつかっていないことは確かである。石材使用の観点や横口式石槨の有無からは一須賀古墳群は磯長に入れてもよいだろう。

4　終末期古墳と古道

河内飛鳥の終末期古墳と古道を考えた時に、すぐに仮説として思いついたのは、二つのことで、まず①地図上に落とした終末期古墳をつなげれば、その時代の道が復元できるのではないかということと、②終末期古墳は古代の道に接して築造されているのではないかということであった。

そう考えた理由は、規模は小さくなったとはいえ、古墳の石室や石槨の築造にあたっては、大きな石材を運搬する必要があるということである。特に終末期古墳特有の石材として良く知られる凝灰岩や石英安山岩などを運ぶ場合はその産地が限られているだけに当然ながら古墳築造場所までの道が必要となってくる。おそらく石材は修羅で運ばれたものと思われるが、修羅を使用するためにはある程度幅があり整備された道が必要となる。このように古墳造りのために造られた道は、後に道路として整備された可能性は高い。だとすれば、古墳の存在からいえば名も知れぬ道が復元できることになる。

②は①とも関連するがあたりまえのことで、後の古墳への追善や、石材や遺体の搬入などを考えれば当然のことと言えるだろう。

次に大津道から竜田道、丹比道と当麻道等の終末期古墳の実際を見ていくことにしよう。

まず、大津道から竜田道沿いの終末期古墳だが、竜田道沿いに終末期古墳が点在する。生駒山脈の最南端、大和川を眼下にのぞむ柏原市東山区域には、消滅したものも含めると約1500基で形成される平尾山千塚古墳群が存在する。古墳はいくつかの支群にわかれ群中に横口式石槨が少なくとも４基存在する。いずれも羨道あるいは羨道・前室をもつタイプに属するもので、白石太一郎氏は、平尾山千塚古墳群を形成した被葬者について「松岳山古墳の被葬者を共通の祖先ないしは大先達と考える南河内地方のいくつかの渡来系集団の共同墓地と考えたい。」とされ、群中に存在する横口式石槨については「百済が最後に都した扶余の陵山里古墳群などにこれに近い構造の存在が認められるところから、百済系渡来人集団との関係が考えられるものである（５）」としている。

また、文献資料では、『住吉大社神代記』神南備山本記に、「四至　東限膽駒川。龍田公田。南限賀志利坂。山門川。白木坂。江比須墓。西限母木里公田。鳥坂至。北限饒速日山。」とあり、大和川付近に江比須墓つまり渡来人の墓があったとする。この江比須墓について、田中卓氏は「松岳山船氏の古墳にあらざるか（６）」として松岳山古墳をあてる。一方、柏原市史において山本昭氏は「「江比須墓」こそ平尾山千塚・高井田横穴墳の両古墳群であろう（７）」とする。

つづいて丹比道と当麻道等の終末期古墳について述べる。

丹比道沿いの来目皇子墓に治定された古墳を中心に小口山古墳、ヒチンジョ池西古墳等が存在する。

小口山古墳は、白鳳期に伽藍が繁栄した善正寺の寺域の西側に所在し、凝灰岩一石を刳り抜いた短

い羨道を有する横口式石槨である。ヒチンジョ池西古墳は、凝灰岩の切石を組み合せた横口式石槨で内部に銅釘が遺存（８）していた。小口山古墳はかって、家形を呈する石槨外形の平坦面指数の大きいことから、７世紀後半に位置づけた（９）ものである。短いながらも羨道をもつことから、年代が遡る可能性がでてきた。ヒチンジョ池西古墳は、従来通り７世紀後半から末でよい。小口山古墳やヒチンジョ池西古墳の被葬者を推定する手がかりは『日本後紀』の中で、菅野真道が延暦18年（799）３月に上表した「己等先祖。葛井。船。津三氏墓地。在河内国丹比郡野中寺以南。名曰寺山。子孫相守。累世不侵。」にある。つまり小口山古墳などが存在する野中寺より南の区域は渡来系集団の墓地だったことがわかるのである。

次に竹内街道いわゆる当麻道沿いの終末期古墳について述べる。

飛鳥川右岸の丘陵上の飛鳥千塚周辺には、観音塚古墳、オーコー８号墳、鉢伏山西峰古墳など８基の横口式石槨が営まれている。いずれも寺山が産出した石英安山岩を使用する。これらは、形式的にはすべて羨道もしくは羨道と前室を有するタイプに属している。被葬者の手がかりは、古墳に近接して存在する延喜式内名神社である飛鳥戸神社にある。飛鳥戸神社は、平安時代以降は素盞嗚命他を祭神とするが、「新撰姓氏録」河内国諸蕃に「飛鳥戸造、出自百済国主比有王男琨伎王也」とあり、もとは飛鳥戸の祖、百済の琨伎王を祭ったものである。したがって、この地域は百済系渡来人の定着した場所と推測される。さらに、考古資料には銀製・金銅製の釵やミニチュアの炊飯具セットなどが群中の古墳から出土しており、つとに渡来人との関連が指摘されている。

また、竹内街道の南側で、平石超えのルートにもシシヨツカ古墳、アカハゲ古墳、塚廻古墳などの終末期古墳が存在する。また、南方の白木古墳群には、２基の横口式石槨が存在する。これらの古墳も被葬者を推定する手がかりはほとんどないが、シシヨツカ古墳、アカハゲ古墳、塚廻古墳の被葬者については、近くに残る地名から塚口義信氏は大伴氏とする（10）。また、石材から古墳の被葬者を推定されている奥田尚氏は蘇我氏の墓域だとする（11）。しかし、ぼくはこれらの古墳についても渡来人が関係しているものとみたい。その根拠は、亀甲繋文銀象嵌円頭大刀柄頭・銀製帯金具など副葬品の内容が渡来的であることとともに、平石谷の南に接して新羅から転じたことが有力な、白木の地名が残ることだ。住吉大社神代記には盛んに白木坂の文字が見え奈良時代頃からの古い地名であることがわかるし、井上正雄『大阪府全志』大正11年では、「而して村名の白木は新羅と國訓通ずるのみならず、北方に多々羅といへる字地あり、多々羅は新羅城邑の名なり（蹈鞴津の名又新羅にあり）、されば恐らくは往昔歸化したる新羅人の往せしより此の名をなせしにあらざるか、後考を俟つになん（12）」とある。また、昭和43年発行の『河南町誌』では、「長坂の北部に多々良という字地があり、中世この地に勢力をもっていた多々良氏は朝鮮新羅の王族が帰化したものであって、シラキ（白木）の名がここから生まれたという説もある。安永のころ（1780頃）、今堂村から出た学僧白庸法師の小伝に「河内石川郡新羅（白木）に生まる・・・（13）」とし、江戸時代に白木に新羅の字があてられていたことを紹介する文章があることによる。

５　古道沿いの古墳の被葬者の性格

次に、古道沿いに存在する終末期古墳の被葬者の性格を考えたいと思う。

例としてあげた河内の古道は、その始まりはともかく、官道つまり政府が設置した道路として差し支えない。特に古墳のある山間部の道は山を削ることで道幅を確保したと思われる。この場合当然自然災害による山崩れは多くあっただろう。今でも大雨や台風の後、国道や鉄道が不通になることはよ

くニュースでよく報道される。現代工法でもそうなのだから古代はなおさらだろう。そうなると当然道を管理修理する人が必要になる。当時土木工事にたけた人たちは新しい技術をもった渡来人であった可能性は高い。また、古墳の位置が河内から大和へ通じる古道の入り口、言い換えればちょうど平坦な地形が大和との国境線の地形、急峻な道への変化点で交通・運搬が困難になる部分にあたる。このような場所には大和朝廷の流通センター的な機能をこの地が持っていたと思われる。近くに蔵塚という地名が残るのはこのためである。駒ヶ谷遺跡で検出された倉庫群（14）もこの一部であろう。これらの物資の移送には馬が使われたと思われる。駒ヶ谷の名の起こりや、馬禿の地名などもこう考えると理解しやすい。

このように考え、憶測をたくましくすると、古道の周辺の古墳に葬られた人は総てではないにしろ、なんらかの関係で、あるときは道の設置、そしてその維持管理に携わった集団や人物の可能性、さらには、古道に接した大和朝廷直属の蔵を管理し、さらにはその移送に携わった人物が考えられるということになる。特に蔵の管理は出納を記録することが必要で、文筆に長じる必要がある。この意味からも渡来人の伝承は見過ごすことができない。

以上、結論として述べたかったことは、大きく終末期の古墳の分布から古代道路が復元できる可能性の高いこと。逆に古代道路に接する近つ飛鳥の古墳は今のところ渡来人の伝承をもちそのすぐれた技術で国家の依頼を受け道の設置・維持管理にあたった人物の可能性が高いこと、文筆に長じることから、古道沿いにあった蔵の管理にあたった人物が考えられるということであった。蔵の管理と古墳の造られた時代を考えると俄然蘇我氏が注目されることなる。蘇我氏が活躍した頃、蔵の管理をしていたことは周知の事実といえる。

6　河内飛鳥の古墳をどうするか

以下は、以前にも書いたことなので詳細はそちらを参考（15）にしてほしいが、このようなタイトルを掲げると昨今ではすぐに整備してそして活用ということになる。活用という言葉は聞こえがよく、現在文化庁も推進しており、最近は文化財を使って街づくりをというキャンペーンがはられている。ぼくは今これに対してなにがしかの違和感がある。

ほとんどの古墳は私有財産なので、取り急ぎ、現状を残すことが何より大事といえ、そのための手段としては、市町村や府の史跡を増やし、府の史跡は国史跡に格上げするなどの努力が必要になる。

一方、誤解を恐れずに言うと、指定がかなったからといって性急な整備・復原はあまり賛成でない。大阪の河南町で整備された古墳に双円墳の金山古墳がある。最近は落ち着いてきたが調査成果から忠実に整備されたものの整備当初は違和感があるという話をよく聞いた。整備以前の金山古墳では、くびれ部に家屋があり犬にほえられた記憶がよみがえるが、末永雅雄先生が航空写真で残されたように、周濠は水田で、墳丘は放射状の蜜柑畑というように古墳もさることながら悠久の歴史を経た後世の古墳利用という重みとすごさがあった。つまり古墳の土地利用の中にも地域の歴史と周辺にとけこんだ風景として古墳を感じることができたのだ。それはそれぞれの古墳がたどってきた歴史性も大事にしたいという考え方である。そこでは、古墳を保存しまさに活用してきた所有者の英知があり多くのことを語り感じることができたのだ。つまり、ぼくが思う古墳の重要性は後の土地利用と周辺の景観を含めての話で、これら総てが教材と言えなくもない。

以上を念頭に置きながら、最後に古墳を教材として捉える一案を示すことで話を締めくくりたい。

一言でいうと、古墳＝歴史資料の教材のみという考え方を捨てたいという提案である。

これまで、遺跡や古墳の整備に尽力されてきた方には恐縮で、お叱りを受けることを承知で書くが、指定後、買い上げが行われると農作業ができなくなるから荒れる。景観上も好ましくない。草刈をしても、会計検査では公有化したのに活用されていないとしかられる。このためあわてて整備計画を立てるという流れがある。

しかし、発想を変えて水田や蜜柑畑を学習水田・学習農園と考え作業の場を提供すると社会科の教材になったはずだ。そこで収穫されたものの重さを量る。数を数えるとこれらの作業は即算数の教材となる。また四季折々の水田や農園には虫や昆虫が訪れる。雑草も生えるだろう。これらの観察は理科の教材だ。また、ここで得た情報を文章にしてまとめると立派に国語になる。古墳の絵を描いたり模型を造れば図画工作。つまり、小学校で学ぶ学科を超えた教科の教材が古墳の中に凝縮されているといえる。

この考えが受け入れられるならば、文化財の整備や活用の委員会では考古学者や歴史学者の意見が幅を利かせるのではなく、むしろ地域の小中学校の教員それも社会科でない先生方の意見や地元の人の考えが重要になる。そうすれば先程の例よりさらに数多くの教材としての活用方策が示されるだろう。

以上、大和飛鳥の中心地でするような話ではなかったのではないかと思われるが、お許しを頂きたい。

註

（1）山本彰「河内二子塚古墳とその類例」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』3　大阪府立近つ飛鳥博物館　1988

山本彰「松井塚古墳と出土土師器」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』4　大阪府立近つ飛鳥博物館　1999

山本彰「『河内名所図会』に描かれた古墳」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』5　大阪府立近つ飛鳥博物館　2000

山本彰「河南町加納古墳群とその周辺の終末期古墳」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』6　大阪府立近つ飛鳥博物館　2001

山本彰「柏原市安福寺横穴群の騎馬人像に関する覚書」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』7　大阪府立近つ飛鳥博物館　2002

上記５編は山本彰『終末期古墳と横口式石槨』吉川弘文館　2007に収録

山本　彰「河内御嶺山古墳と河内飛鳥寺」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』11　大阪府立近つ飛鳥博物館　2007

山本彰「切石横穴式石室の基礎資料－大阪府南河内郡太子町太平塚古墳の検討－」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』12　大阪府立近つ飛鳥博物館　2009

（2）山本彰「近つ飛鳥を歩く－終末期古墳を中心として－」『古代史を歩く７河内』毎日グラフ別冊　1987

（3）大阪府立泉北考古資料館『夏季特別展河内飛鳥』84.6.12～9.30　泉北考古資料館だより19　1984

（4）山本彰「聖徳太子磯長墓考」『関西大学考古学研究室開設四〇周年記念考古学論叢』　1993

後「聖徳太子墓の検討」と題して『終末期古墳と横口式石槨』（前掲）に収録
（5）白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試行」『古代学研究』42・43合併号　1966
（6）田中卓『住吉大社神代記の研究』国書刊行会　178頁脚注　1985
（7）山本昭「古代の柏原」『柏原市史』第2巻　柏原市史編纂委員会　1973
（8）森浩一「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地－古墳終末への遡及的試論として－」『古代学研究』57　1970
（9）山本彰「終末期古墳の編年－大阪南部の古墳を中心として－」『網干善教先生華甲記念考古学論集』1988　後「横口式石槨の編年」と題して『終末期古墳と横口式石槨』（前掲）に収録
（10）塚口義信「横口式石槨の被葬者像」『季刊考古学』68　雄山閣　1999
（11）奥田尚『古代飛鳥石の謎』学生社　2006
（12）井上正雄『大阪府全志』巻4　147頁　清文堂書店　1922
（13）河南町誌編纂委員会『河南町誌』河南町役場　806頁　1968
（14）（財）大阪府文化財調査研究センター『駒ヶ谷遺跡－南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書』1999
（15）山本彰「近つ飛鳥と磯長谷」『ヒストリア』212　大阪歴史学会　2008